地理学分野からの感想とコメント

藤田佳久
（愛知大學文学部）

Dept. of geography　FUJITA Yoshihisa
Aichi univ.

０．　時間がとれず、ゆっくり読めなかったことをお断りして、若干感想とコメントを述べさせていただきます。

1.　地理学は古代ギリシャ以来の古く成立した学問です。そこではギリシャを中心にかれらの行動範囲の拡大の中で、北部に草原、南部に海洋、砂漠の配列を知り、自然の配列とそれに対応した人間社会とのいわば環境論的地人相関の中で地域論を展開し、この論理はのちにモンテスキューの論理に継承されています。18 世紀から 19 世紀にかけて地理学の近代化の中で、それまでカントが〈地理学綱要＞で示したような地表空間の地誌的知の体系の学問から、諸要素の因果関係をベースにした地表空間における地域の体系、さらに地域の構造論へと転換し、戦後はスプートニクショック以降アメリカ、イギリス、北欧の諸国で進められた地理学革新運動の中で方法論や認識方法の再検討や新領域の開拓が進行中です。その際のベースは一貫して地域論や場所論、地域システム論であり、地域の認識の上での＜地域＞自体を対象とした学問であります。紛れもなく地理学は地域研究そのものです。

その点で、戦時中から始まったアメリカの戦略的＜地域研究＞に地理学者が登用されたりはしましたが、地理学の地域研究とかさなるほどの方法論はありませんでした。このアメリカ発の＜地域研究＞は、戦前からのヨーロッパの未開民族を対象とした社会人類学に抗して文化人類学をうみましたが、構造主義も含め認識論の議論が中心で、その学問の原理はまだ模索中のように見えますし、未開民族を対象とした点では共通し、いわゆるオリエンタリズムのシンボル的存在といえるでしょう。日本では　1980 年代にかけて沖縄からの発信をおこなった＜地域主義＞論が地域研究への新鮮な関心をよんだのが最初であったように思います。しかし、この＜地域主義＞は運動論であり、方法論であり、評論であって、当時急激に進んだ過密過疎、地域格差への政策批判でありました。その限りにおいて沖縄の現実が取り上げられましたが、本来沖縄が蓄積してきた地域固有の特質やシステムが地域の特性として実証的に把握されたわけではありません。前者がいわゆる＜地域研究

＞を標榜して登場してきたことに、後者をベースとする地理学の地域研究からは違和感を禁じえませんでした。

したがって、地理学からみると、突然沸きあがってきたいわゆる＜地域研究＞の枠の中で共同研究をおこなうことは難しいことでした。それらと接合するにはなんらかのアダプターとかコンセントが必要だったからです。今日地理学も地理学の膨大な成果をどう実践に生かすかという視点を模索しつつあります。いわゆる＜地域研究＞やほかの研究領域に接合できれば、いわゆる＜地域研究＞に厚みと説得力が増すことが考えられ、地理学にも新たな視点をもたらすことにもなるからです。短兵急で対象地域への政策関与を目的とし、目的的にもみえるいわゆる＜地域研究＞は、ジャーナリスチックであり、消費的にも見えるからです。

地理学はその手法や認識において欧米からのそれがベースではありますが、認識の方法にはいわゆるオリエンタリズム的発想はなく、あくまでベーシックな基層からの視点の地域研究に立ち、それゆえアナーキーなところがあります。そのことは強いて言えばいわゆるオリエンタリズムとは遠い距離にあるといえます。また、そのことが、政策ベースのいわゆる＜地域研究＞側からみれば、接合すべきアダプターやコンセントみつからないまどろっこしさの感を受けるのでしょう。

２　ところで、地理学がいわゆる＜地域研究＞やほかの分野と接合するのにアダプターやコンセントが必要だと述べましたが、これは地理学だけの問題ではないはずです。

加々美教授の提案の中の 23 ページには、いわゆる＜地域研究＞者はさまざまな専門分野の研究者がいわゆる＜地域研究＞を冠にして、地域と称する対象を応用や実践の側面に利用しているだけだ、と言及している部分があります。つまり、いわゆる＜地域研究＞とはいえ、さまざまな学問分野の寄せ集めに過ぎず、故事にあるように盲目の人が象に触ったとき、鼻にさわった人は、象は細長いといい、耳に障った人は、象は薄っぺらなものだといい、足に触った人は、象は太いものだといって、それぞれ勝手に理解したのと同じことになります。また鼻や耳、足をかってに持ち寄ってひっつけても、だれも全体像の象の形をしらないわけですから象の形にはなりません。

このことは、まずいわゆる＜地域研究＞は地域を対象とするとしながらも専門領域の研究をその対象地でおこなっただけに過ぎず、地域研究ではないことを示しています。個別の研究の延長に過ぎないこういうことになります。つまり地域と称することで研究費を取るなどのための方法に利用しているということになるでしょう。したがって全体像をどうとらえるかというようなことは不可能であります。

つまり、いわゆる＜地域研究＞を標榜するのであれば、各学問分野は相互にアダプターやコンセントをどう作り出せるのかという基本的な問題があります。それには、それぞれの問題の切り口を相互に示しあえるかどうかということを、相互に理解し認識できるかということでありましょう。

地理学は地誌学をとうして地域の全体像をどうまとめるかにやはり工夫が必要でありました。今日ではそれを地域のシステムとして各地理学の該当地域の主題部門を纏め上げ、しかもほかの地域との比較を通して、地域の個性、特性を把握しようとしています。地理学でも各分野の専門化が進み、そのような相互の接合をどのような原理でおこなうかについてはなお継続的課題であります。

したがって、国単位の研究であっても、提案されたコ　ビヘビオリズムが対象とするとする個人や　企業、集団、国家などの多くの主体分野を各研究者が研究するとして、それらを全体像の把握のためにどのようにまとめあげるのかについての検討が不可欠であります。各学問分野の相互のアダプター作りやコンセント作りとその見通しがその前に、あるいは同時に必要であります。しかも、もしそれが出来上がったとしても、それが操作的でないという保障はないとおもわれます。

３．最後にメモ程度ですが、

（１）今日、オリエンタリズムは実質グローバリゼーション主義へ変質したといってもいいのではないでしょうか。反グロの動きはアジアだけでなく、ヨーロッパやアメリカにも見られ、オリエンタリズムのレベルを超えていると思われます。逆に見れば、オリエンタリズムの視点者であるアメリカやヨーロッパのなかにオリエンタリズムが元来内包され、それがより一層顕在化するなかで発現したともいえるでしょう。日本の立場も同じです。中国はどうでしょうか。

（２）脱オリエンタリズムの歴史的事実として、明治期の日本で日中連携による東アジアから列強の排除をめざす動きがありました。愛知大學の前身的存在であった東亜同文書院の根津一院長らによる王道思想はそれであり、そのために中国や朝鮮の底上げを図る目的で学校教育普及への協力をすすめたのです。のちにそれとは別に軍部の軍事行動がその思想の進行を邪魔しましたが、同様な例は太平洋域でも見られました。東アジアについては、その思想と軍部の行動とは別でしたから、思想的側面については東アジア型の思想発信としてオリエンタリズムとの関係で検討の余地があるように思われます。